

とうきょう すくわくプログラム

活動報告書

保育園番号	66-1035
園名	さんいく保育園有明

1. 活動のテーマ

<テーマ>

友だちと力を合わせて自分たちで収穫したさつまいものおやつを作ろう！

<テーマの設定理由>

芋掘り遠足で収穫したさつまいもの追熟ができ、さつまいもが食べごろへ。
お芋の種類やお芋の育ち方、収穫の仕方、等々、お芋で知らないことはない？
いいえ、お芋の調理についてはまだ知りません。
さつまいものクッキー風おやつのクッキングを通して、さつまいもの調理の仕方やさつまいもの味や香りを知り、学びへ繋げていきます。

また、今回がすくわくプログラムの最終回。
いままでのお芋の栽培や収穫、芋ほり遠足で農家さんとさつまいもの収穫、収穫感謝祭、クッキングを通して、食べ物が食べられるまでには、沢山の時間の中で、いろいろな人が協力して出来ていることを知りました。
食べ物の貴重さや大切さを考える機会として、最終回を設定しました。

2. 活動スケジュール

【導入】芋掘りセブンからの手紙

→さつまいもの調理について触れる内容

【調理特製の説明】

→調理する前はかたいさつまいもが、温める（調理する）と柔らかく変化し、食べられるようになる+香りもするようになる

【さつまいものクッキー風おやつのカッキング】

栄養士がさつまいものクッキー風おやつの材料の説明

作り方の説明は手順毎に、先に栄養士が行い、子どもたちも作業

→1. 蒸されたさつまいも（油入り）をジップロック袋に入れてつぶす

2. 粉類を見せた後に、1.の袋へ粉類を加え、粉が見えなくなるまで混ぜる

3. 2の生地をクッキングシートの上で形を作る（型抜きや手で成形）

（厨房の冷蔵庫で保管し、おやつ前にオーブンで焼く）

4. おやつに自分たちで作ったさつまいもクッキー風おやつを食べる

→園長先生に園児数名（当番）がおやつのお届けをする

3. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
- ・活動中の子どもの姿・声、子供同士や教諭との関わり 等を記載ください。

【準備物】

◆いもほりセブンからの手紙

→いもほりセブンがすくわくプログラム当初から見守ってくれているもとの、お芋の学びを行っており、

「きょうは、ほったお芋を使ってクッキングをするんだって？」といもほりセブンのセリフから、今までのお芋の学びからクッキングが続いていく流れができています

◆クッキー材料：さつまいも、米粉、片栗粉、砂糖、塩、油、ベーキングパウダー

→アレルギーに対応して、乳製品や小麦製品は不使用にした

◆クッキーの成形：クッキー型及び手を使用

→好きな形を選択できるようにした

◆クッキングペーパーの準備

→生地成形、焼成、おやつ時の喫食で、自身の作成したものを口にできるようにあらかじめ記名してクッキングペーパーを準備した

【活動に取り入れたこと】

◆1グループ4人で構成して、1つの生地を作成してもらう中で、

3歳・4歳・5歳が混ざるような構成にした（異年齢交流）

【保育者の関わり】

◆栄養士が導入を行い、1つの手順毎に説明し、子どもたちが作業を行う

→作業の順番や、今やるべきことに迷うことなく進めることができていた



4. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

異年齢での作業グループを構成することにより、5歳児が3歳児の三角巾を付けてあげる姿や、5歳がさつまいものつぶし方の見本を見せる姿があり、5歳が自然とリードを行っており、3歳・4歳が信頼して一緒に作業をしている様子があった。全体的にいつもより相手のことを考えて行動している様子もあり、異年齢での作業の良さが垣間見れた。

さつまいもクッキングは、今までのすくわくプログラムの最終回として行い、プログラム開始時と比べると、さつまいもに親しみを持っており、さつまいもについて沢山の知識を持っている様子があった。さつまいもが食べられるには、火を通すことと伝え、さつまいもの物性の変化の質問をしたところ、かたさの変化や、香りの変化について答えることが出来ていた児も数名いた。クッキング中は作ることの楽しさを、おやつ時間では、食べることの喜びを、そして、全体を通して、自身で作ったという達成感を得ている様子が確認できた。

すくわくプログラム開始当初から絵本のキャラクターである「いもほりセブン」がさんいく保育園有明の子どもたちの活動を見守り応援してくれているという設定のもと、プログラムを進めた。芋ほりセブンからの手紙が随所で届き、すくわくプログラムとは別の行事での子どもたちの様子を励ましたり、褒めてくれたりするような手紙の内容に加えて、プログラムの行先や、振り返りができる内容になっていた。「いもほりセブン」がキーポイントとなり、子どもたちは日常とプログラムを平行して考えられ、混乱することなくプログラムが進行できたように感じる。プログラムとは別の行事「クリスマス会」でも「いもほりセブン」のイラストを会場の奥の壁に張り、芋ほりセブンに声を届けようと頑張る歌やセリフを言う子どもたちの姿も見られた。

すくわくプログラム全体を通して、協力する力・達成するための努力・知ろうとする力が培えたように感じる。長期間に渡り、同じテーマを行えたことで、「知れた」より深い「理解した」や「探求したい」の気持ちがひとりひとりに芽生える活動となった。